

慈眼寺たより

第3号

平成19年12月
春日井市下市場町
「慈眼寺」

電話 81 6801
編集 伊藤秀文

桃づくり六〇年

大野友夫

突然、住職から「下市場の桃について書いてくれ」と言われ困惑しました。どこまで書けるか心配ですが、記憶を辿ってみたいと思います。

戦前は、当地での桃の栽培は二軒のお宅のみでなされていましたが、昭和二十三年に私をふくめて三人の有志が矢合で品種大久保を求め植えました。その二年後に、地区外の人から十三塚の松林について、農地法による開墾適地の申請が農地委員会に出され、強制買収のおそれが出てきたので、関係者が相談の結果、自分たちで開墾することにになり、稲の収穫後それぞれが開墾にかかりました。その土地に桃が植えられ一挙に集団化したのです。昭和二十九年に果樹組合が結成され、慈眼

寺裏の旧公民館の軒に仮出荷場として集荷し、大泉寺で亜炭を運搬されていた方達に運んでもらって、名古屋の中央市場に共同出荷が始まりました。

さらに、戦後の食糧難の救世主だった甘藷(おいもさん)が、カマスに詰められて澱粉工場に安く買いたたかれるようになる。甘藷に代わっていつせいに桃が植えられ、春日井市の一大産地になりました。開墾した十三塚に変電所が出来ても本田畑(以前からあった畑)の桃が最盛期となり、出荷量が一時春日井で一番にまでなりました。その頃は栽培農家も六十八戸になり、変電所の建設事務所は建物を買ひ下げてもらい、出荷場に建て直したが、五間×一〇間の建物に入らなくて、隣の神社境内に出荷桃箱が積まれる日も多かつたほどです。

各地からの出荷量が多くなると、名古屋市場では値崩れが始まり、農政課の指導もあって県外出荷を始めました。名古屋の大箱(七・五kg)と東京の小箱(四kg)と値段が同じ位でした。最初はいろいろ意見も出ましたが、その後は持ち寄り共同選果へと進み、これが出荷の最終方法となりました。

また、開墾時はこれという肥料が無く三年は成長が悪く、名古屋の中央市場から出る生ゴミを運搬料の半分を支払って、一〇アールに三車入れ、これを二年続けてやっと元氣よく成長するようになりました。今と違って当時はゴミといえればガラス瓶の割れたのも入っていたため、その処理に困ったことを思い出します。ちなみに肥料

難の例をあげますと、田の肥料に名古屋の堀川のヘド口の生乾きを運搬料を支払って入れていました。勿論糞尿なども大切な肥料でした。やっと成木になつたら変電所用地に買収され、喜ぶ人(畑の多い人)と残念がる人に分かれました。

栽培に一番重要なことは病

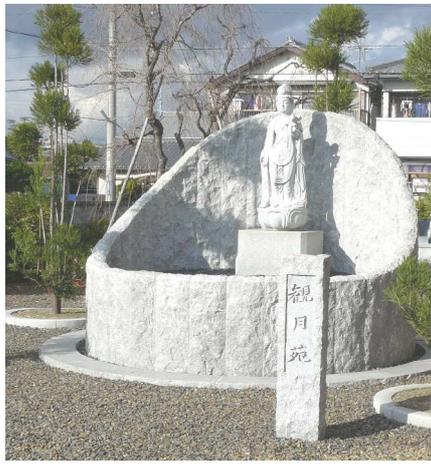
害虫の防除です。病気は定期的消毒でよいのですが、虫は毎年発生日が違い、適期を逃すとせっかくの消毒が無駄になってしまいます。特に注意が必要なのがしんくい虫です。最初の発生で防除が出来れば二期三期の発生が少なくなりません。なお効率のよい方法は一斉防除です。全員が同じ日に消毒するために部落放送を設置し、拡声器で組合員に知らせました。私の経験の中で一番印象に残っている虫の被害は、変電所の建設中の夜間に電灯を灯し続けたため、それまであまり見かけなかった夜蛾が大発生して、周辺の桃が大被害を受け、変電所建設事務所に損害補償を請求したこともありました。

出荷方法と防除について意見があつてやってきましたが、都市化の波と生産者の高齢化は防ぐことは出来ません。現在は組合員九名の形ばかりの組合になつてしまいました。昼食をまともに食べることも出来ないほどに忙しかった当時を懐かしく思い出しています。

(前檀方総代)

観月苑について

「整備たより・八号」にも掲載されましたが、本堂西側に「観月苑」という石柱と観音様が祀られた不思議な構築物があります。これはいわゆる合祀墓であります。



かつてはお墓や仏壇などにご先祖様から農地と一緒に子孫へと伝えられるのが慣わしでありました。それがほとんどがサラリーマン所帯となり夫婦と子供だけという核家族となってくると、それぞれが一戸を構え、それに合わせてお墓も核家族的なものになってきました。ところが子供たちが巣立って、気が付いてみると大きな家に老夫婦が取り残されてしまっていることが往々なのです。老夫婦でもまだ元気なう

ちは良いのですが、いつまでもそんなことは期待できません。親元から遠く離れて生活基盤を作ってしまった子供の世代はもはや故郷へ帰ることはできないでしょう。私を含めて多くの人がグループホームや介護施設の世話になる予定のようです。

それはともあれ、お墓についても同様な事情になってきているようです。核家族に一つのお墓というのは、ひとつの願望がもたれませんが、どうやらそれが維持できなくなってきたことに皆さん気が付き始めました。また、そうでなくても一人だけで入れるお墓を望まれる方も増えてきました。

そんなわけで、この合祀墓が出来ました。家族風呂に対して共同風呂というふうを考えていただければ分かりやすいでしょうか。温泉などの共同風呂もまた楽しいではありませんか。「観月苑」という名前は皆で露天風呂につかってお月さんでも見ようや、という趣旨からつけられました。それも一〇〇〇年ぐらい・・・。

平成二十年度年忌表

年忌は次のとおりです。日取りが決まりましたら、お早めにお申し込みください。

年忌	逝去年
一周忌	平成十九年
三回忌	平成十八年
七回忌	平成十四年
十三回忌	平成八年
十七回忌	平成四年
二十三回忌	昭和六十一年
二十七回忌	昭和五十七年
三十三回忌	昭和五十一年
三十七回忌	昭和四十七年
四十三回忌	昭和四十一年
四十七回忌	昭和三十七年
五十三回忌	昭和三十一年

各個別の年忌はホームページでも見られます。ご利用ください。

行事予定

一月十一日 大般若会

正午から詠讚歌奉詠

午後一時から般若祈祷、法話の会があります。

二月十五日 涅槃会

十時から法要。

四月八日 灌仏会

十時から法要。

甘茶をいただいでください。

八月十八日 お施餓鬼

八時から。受付は七月一日からはじめます。

棚経は八月十日くらいからです。

浅山以西名古屋 八月十二日

四ツ谷地区 八月十三日

下市場郷中 八月十四日

穴橋・篠木・高蔵寺・坂下ほか

八月十五日

(ご不明な方はお問い合わせ下さい)

墓地管理について

先回もお願いましたが、墓地内の公共的なところは管理委員会の方で管理しますが、各区画内については使用者の責任で清掃をお願いしております。あまり乱雑ですと隣近所の迷惑にもなります。ぜひともご協力をお願いいたします。またお気づきの点がありましたら、慈眼寺または役員までお知らせいただければ幸いです。

お知らせ

これまで檀方総代は、各地区担当でお願いしてきましたが、庶務兼墓地管理専任ということで、伊藤秀文氏にお願いし快諾していただきました。なにとぞよろしくお願いたします。

老齢に慈悲の眼差し

観世音

十五億回の寿命

住職 春日井浩道

最近、何かの本で、一般的な野生の哺乳動物の寿命は、心臓の鼓動が十五億回くらいのものだということを読みました。心臓がゆっくりに打つ象などでは長く、ピクピクと早打ちする鼠などは当然に短いのです。もちろん、この十五億回というのは自然のままの状態、すなわち医者にもかからず、薬も飲まず、加工したのも食わずということなのです。私の脈拍は、毎分六〇回くらいですから、この十五億回というのは約四十七年になります。昔から人生五〇年というのはそんなに的外れな長さではないでしょう。

ちかごろ犬の散歩をされている方をよく見かけます。ほとんどが値段の高そうな犬なのですが、その犬についてよく話題になることは、「老犬介護」の問題なのです。最近の犬はフィラリアの予防もなされ、食べ物バランスもいいせいか、二〇年を超えて長生きするものも出てきています（ただ、犬の脈拍は毎分六〇〜一二〇くらいだそうですから、先の十五億回の基準からは、若干短すぎるような気がします）。

まあ、それでも長生きの犬が増えてきていることは事実でありまして、

以前私のところにいた犬も一七年生きました。ところがその最後の三年くらいは惨たんたるものでありました。耳も聞こえない、目も見えない、鼻もおそらく効かないうえに足腰が弱ってしまつた。歩くにしてもヨロヨロでどこへ行くかは足に聞いてくれという状態だつたのです。それでも脱走して行方不明になり、警察に問い合わせたら、奇特な方（この方との関係もまた奇遇だつたのですが）のお世話で獣医さんのところに保護されていた、というようなこともありました。それも意外な遠方でよく車にはねられもせずここまで歩けたというような所でした。また、理由もなく一晩中夜鳴きをして近所の方に迷惑を掛けたこともありました。そのほかに腰が立たなくなつて、ダツコで散歩される話とか（散歩にどんな意味があるのでしょうか）、オムツをしているとか、癌になつて手術代が十万円とか、白内障をどうしたとか。まるで人間様の話をしてるような内容なのです。この分では心筋梗塞や脳梗塞も当然あるでしょうね。この犬の老いさらばえを見ながら考えさせられました。見回してみると動物の世界で、壮年をすぎると生きていられるのは人間と、一部のペットだけです。植物なら水

と温度と光さえあれば細胞が再生される限り生き続けられる。だから縄文時代からの個体がいまだに生られるのです。そこへいくと動物は、自分で餌を取れなければ、または他の動物から逃げられないようになつたらそれで個体の命はおしまいです。足が一本折れたことが殆ど命を失うことになつてしまふのです。集団で行動する動物でも傷ついた仲間を扶養するような余裕はありません。猿の群などでボス猿が傷つけばあつという間にボスの座から引きずりおろされてしまふのです。動物では生命の維持はそれぞれの個体の体力にかかつているのです。これも何かの本で「メスの猿は死ぬまで子を産む」というようなことが書いてあつたが、本当は「子を産む体力がなくなつたら自分の命も維持できない」でしょう。どこかの知事さんが同じようなことを言つてヒンシユクを買っていました。まあそんなわけで、動物の命は文字どおり体力の必死な稼動によつてようやく維持されているものなのです。そのレベルの体力がなくなれば、飢え死にしたり、生きながら他の動物に食われてしまふのです。だからこそ、野生の動物はみんな澁刺と精悍なのです。NHKテレビでやるような「野生動物

檀方総代	伊藤辰男
全	伊藤秀文
全	伊藤正廣
全	伊藤正
全	大野和義
全	大野悟
全	木村廣孝
住職	春日井浩道

の楽園」なんてのはそんな輝ける一断面の投影なんですよ。つぎに考えさせられるのは、体力が維持できなくなつた個体を、周りから支え扶養してやることとその個体にとつて果たして幸せかということですよ。まあ、生きがいを持つた人間の老人の場合は別として、一般の動物ペットやそれに近いようなものを、餌やら医療などをふんだんに施して生きながらえさせても、彼はほんとに幸せなのだろうかという疑問はぬぐい切れません。生命を維持することは本来苦行以外の何物でもない、とはお釈迦様の言葉なのです。十五億回の話からずれていつてしまいましたが、やはり特定の生き物にとつて最適な寿命というものがあるような気がするのです。それをあまりに人為的に変更させることが幸せになるとは思えないのです。もちろん個人差はあるのでしようが。

来年も良い年になりますように

梅花講たより

梅花講の活動の中一つに、追
甲・追善供養時等の奉詠がありま
す。
梅花講の親族の方のお通夜の前
に詠讃歌をお唱えしたり、又共楽
会（老人会）の総会・慰霊祭の時
にも追善供養等の詠讃歌をお唱え
します。



写真は、私の父のお葬式の時、
講員さん達が奉詠している様子で
す。とても有難く、うれしい気持
ちでいっぱいでした。

来年は、慈眼寺の各種行事に参
加する他に、五月には全国大会福
島県）・尾北大会（江南市）、十月
には名古屋市で管内大会等に登壇

する予定です。

この様に、梅花（御詠歌）を通
してたくさんの方々と出会える
ことは、楽しみでもあります。



十九年五月全国大会（埼玉県）旅
行・横浜市三溪園にて

全国大会は登壇・奉詠のほか、
このように会場近辺の観光地を訪
問します。大抵は気候のよい五月
に開催されます。

講員募集中

月曜日の夜に、新しいクラ
スガ、休憩をはさんで二時間
練習をしています。一度見学
にみえませんか？ 連絡をお
待ちしています。

お仏膳受付中です

平成二〇年のお仏膳を受付中
です。本年と変わらず、一膳一年当
たり一五〇〇円です。お供え物
お菓子はお下がりとしてお持ち
帰りください。

あとがき

やっとの思いで第三号を出
せる見通しがついてきました。
一年わずか二回の発行で、それ
も半分は定型の記事になって
いるのですが、気ばかり焦って
なかなか文章が出てきません
でした。作家という人たちは、
何という才能の持ち主なんだ
ろうとヒガんでしまいました。
やはり、日頃から考えたことを
書きとめ、まとめておく作業が
必要なのでしょう。

今回は、昨年まで檀方総代を
務めていただいた大野友夫氏
にお願ひしました。今から四〇
年も前にこの辺りが、桃の一大
産地であったことなど忘れ去
られようとしています。本文に
もありましたように神明社脇
の出荷場に、桃の箱がうす高く
積み上げられ、連日大型トラッ

クが集荷に来ていたのが、ほん
の数年前のようです。桃つくり
に強い思い入れを感じさせる
文章を、本当に快く書いていた
いただきました。ありがとうございます。

住職の文は、とても重い感じ
になってしまいました。毎回同
じようなことしか書けず申し
訳ないのですが、最近考えるこ
とはそんなことばかりです。
「老」とか「死」とかというこ
とが、自分にとってもそんなに
遠い話ではなくなってきたの
でしょう。

こんな小誌でも続けておれ
ばそれなりの意義が出てくる
ものだ、と信じて続けていき
たいと思っております。そして今
回から編集を伊藤秀文氏にお
願ひしました。皆様方にも原稿
をお願ひすることがあると思
いますが、なにとぞよろしくお
願ひします。良い年をお迎えく
ださい。

「慈眼寺たより」第三号

平成十九年十二月十五日発行

ホームページ

<http://www.ma.ccnw.ne.jp/jigen/>